

04-1 自閉スペクトラム症児の食に関する行動障がい測定する尺度の開発

— 構造的妥当性, 内的一貫性, 内容的妥当性の検討による項目の選定 —

○中岡 和代(OT)¹⁾²⁾, 立山 清美(OT)¹⁾, 倉澤 茂樹(OT)³⁾, 丹葉 寛之(OT)⁴⁾, 高畑 進一(OT)¹⁾, 東 泰弘(OT)²⁾⁵⁾

1)大阪府立大学

2)大阪府立大学大学院

3)関西福祉科学大学

4)藍野大学

5)関西リハビリテーション病院

Key word : 自閉スペクトラム症 / 障害, 食事, 行動評価

【はじめに】 自閉スペクトラム症(以下, ASD)児の46~89%に食に関する行動障がいが見られることが報告されている。しかしながら, 本邦には網羅的かつ定量的に把握する尺度がない。すなわち, 対象児の状態把握, 支援方法の検討, 介入効果の判定の指標が存在していない。そこで, 我々はライフステージに応じて異なる食に関する行動障がいを幅広く継続的に把握するため, 3~18歳のASD児の食に関する行動障がいを測定する尺度ASD-Mealtime Behavior Questionnaire(以下, ASD-MBQ)の開発を進めている。これまでに内容的妥当性(内容適切性, 内容網羅性, 表面的妥当性)を検証しASD-MBQ試作版を作成した。今回, ASD-MBQ試作版を用い, 構造的妥当性, 内的一貫性, 内容的妥当性の検証を行い項目の選定を行ったので報告する。

【方法】

調査対象: 3~18歳のASD児を対象とし保護者に回答を求めた。

対象者の選出: ASD児が通っている通園施設等24ヶ所, 特別支援学校1ヶ所, ASD児の保護者が所属している親の会23ヶ所の研究協力責任者が対象者734名を選出した。

調査方法: 2016年8月~2017年10月の期間に郵送にて実施した。研究協力責任者が対象者へ書面および口頭にて本研究の目的および概要を説明し, 返信用封筒と調査票を配布した。対象者が本研究への協力に同意した場合にのみ無記名で回答し研究代表者へ返送した。調査内容は基本情報, ASD-MBQであった。

分析: ①ASD-MBQ試作版の項目の精選(天井効果, 床効果の項目を削除), ②探索的因子分析(主因子法, プロマックス回転, 因子負荷量0.4未満の項目を削除), ③内的一貫性の検証(Cronbachの α 係数), ④

内容的妥当性の検証(専門家会議)。統計処理にはIBM SPSS Statistics version25 for windowsを用いた。なお, 本研究は所属先の倫理審査委員会の承認を受け実施した(承認番号2016-207)。

【結果】 454名から回答が得られ回収率は61.5%であった。このうちASDの診断がない66名, 19歳以上2名, ASD-MBQ試作版未回答率25%以上2名の合計70名を除外し384名を分析対象とした。回答者は母親372名, 父親10名, 祖母1名, 不明1名であった。ASD児の平均年齢は 9.8 ± 4.2 歳, 性別は男児301名, 女児82名, 不明1名であった。

①ダミー項目3項目, 行動以外のことを尋ねている4項目, 類似の質問や複数の質問が含まれている3項目, 床効果を示した32項目の合計42項目を削除した。

②61項目で探索的因子分析を行い, 最終的に5因子42項目となった。

③Cronbachの α 係数は全体で0.930, 5因子において0.781~0.923であった。

④専門家会議にて内容的妥当性の検証がなされ, 各因子は「偏食」, 「不器用・マナー」, 「食への関心・集中」, 「口腔機能」, 「過食」と命名された。

【考察】 本研究ではASD-MBQ開発にあたり全国から対象者を選出し384名が分析対象となった。構造的妥当性の検証では探索的因子分析を用い, サンプルサイズにおいてCOSMINチェックリストの基準「Good」を満たした。また, 3~18歳の全年齢を網羅しており, 男女比も疫学研究の報告と同様であった。分析結果より5因子42項目から構成されるASD-MBQの構造的妥当性, 内的一貫性, 内容的妥当性が確認された。今後はASD-MBQの実用化に向けて取り組んでいきたい。